



高知県

第46号 2007年1月

農業技術センターニュース

		目	次	
	メロン果実腐敗病（仮称）の発生	・・・1		若どりによる赤ピーマンの品質への影響
	グロリオサ‘ミサトレッド’の養分吸収特性	・・・2		ナシの本県オリジナル新系統の特性
	高知ナス新品種‘土佐鷹’の育成	・・・3		種子冷蔵苗を利用したトルコギキョウの栽培

メロン果実腐敗病（仮称）の発生



メロン果実腐敗病（自然発生）



果実内部に病原菌を接種して発病させたメロン

県内のメロン産地で、収穫後の果実内部が腐敗して悪臭を放つ果実腐敗病（仮称）が慢性的に発生しています。

本病に感染したメロンは、内部が激しく腐敗していても外観は健全果実と変わらないため、出荷後に発見される危険性があり、産地イメージへの影響も心配されています。

本病が *Erwinia ananas* という細菌の感染によって発生することは既に明らかにされていますが、発生生態については分かっていません。そこで、病原細菌の感染経路や感染時期を明らかにし、本病の発生を未然に防ぐ方法について研究を進めています。

これまでの調査から、交配期に多湿状態

であると本病の発生率が高くなる傾向が示唆されています。

また、発病と温度との関係を接種試験により調査したところ、果実の内部温度が10℃以上になると腐敗が認められ、37.5℃以上で激しい症状が確認されました。このことから本病は、高温条件下で腐敗が助長されることが考えられます。

本病原菌については、選択培地による検出法や、分子診断技術による簡便かつ迅速な検出法が次々と開発されており、現在これらの手法を利用して、感染経路の特定と防除対策の確立を急いでいます。

（病理担当 安達理恵 088-863-4915）